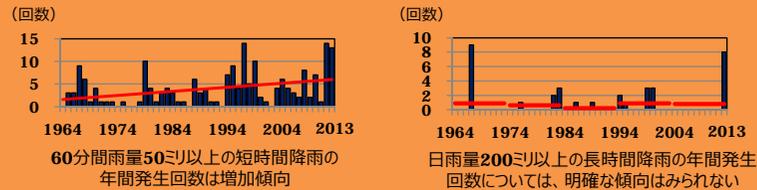


1. はじめに

- 大阪府においては、治水施設の整備の進捗に伴い、水害による被害は着実に減少しているものの、依然として水害の解消には至っていない。このような中、平成27年9月関東・東北豪雨による甚大な被害が発生し、改めて浸水被害軽減の重要性を認識したところである。
- 本府では、平成22年に「今後の治水対策の進め方」を策定し、浸水被害の軽減対策を進めているが、今回改めて本府における近年の降雨及び水害の特徴を整理し、これに対する取組み方針についてとりまとめるものである。

2. 大阪府における近年の降雨及び水害

◆大阪府における近年の降雨（雨量観測所の設置地点における局所的な降雨の傾向）



◆大阪府における近年の水害の特徴

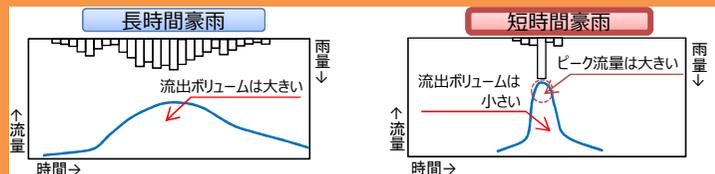
- 「短時間豪雨」が、都市部における下水道、水路及び流域面積の小さい河川からの氾濫による被害（内水浸水被害）を発生させる。
- 外水氾濫被害に比べ、内水浸水被害が圧倒的に多い。



内水浸水状況



※「長時間豪雨」と「短時間豪雨」のイメージ



◆大阪府の計画降雨について

- 治水計画の検討にあたっては、近年の降雨も踏まえ、計画降雨の妥当性について検証しており、当面の治水目標の設定手法は妥当である。
- 降雨現象は常に変化しており、計画降雨について引き続き不断の検証を行うことが重要である。

3. 短時間豪雨対策に関する考え方

- 下水道、水路及び流域面積の小さい河川において急激に水位が上昇し、これら治水施設の流出能力を超える雨水が溢れ、局所的な浸水被害が発生する。
- 治水施設の流出能力を一時的に超える雨水の貯留、浸透により、下流への流出抑制を図る「防ぐ」施策や「凌ぐ」施策が、治水、環境、経済性の面から有利となる。
- 流域面積の小さい河川等については、水位の上昇が急激で氾濫までの時間が短いことを念頭に置いた「逃げる」施策に取り組むべきである。
- 要対策地域や対策の優先順位については、外水氾濫及び内水浸水の両者を考慮したシミュレーション結果や浸水実績等に基づき、現況の浸水リスクを評価したうえで設定し、対策については、ロードマップを作成のうえ、市町村と連携して着実に進めるべきである。

「防ぐ」施策

- 貯留施設等の流出抑制施設の設置を中心とした対策
- 河川施設と下水道の増補幹線が一体となった効率的な施設整備
- 10年に1回程度の大雨を対象とした下水道施設の着実な整備



貯留施設（調節池）

「凌ぐ」施策

- 農林部局との連携による、都市部に残された「ため池」等の既存ストックの有効活用（流出抑制）
- 止水板設置等の公的支援による住民等の自助活動の促進



泉州地域のため池群

「逃げる」施策

- 垂直避難を念頭に置いた「逃げる」施策
- 早期に精度の高い水位予測を行うことのできる技術開発

4. 長時間豪雨対策に関する考え方

- 平成27年9月関東・東北豪雨のような長時間豪雨に伴う洪水は、河川の堤防の決壊を引き起こす恐れがあり、それに伴って発生する氾濫流により、堤防近くの家屋が倒壊、流出し、人命が危険にさらされる。また、浸水は広範囲かつ長期的にわたり、被災者の生活にも大きなダメージを与えることになる。
- 治水施設の能力には限界があり、当該施設では防ぎきれない洪水は必ず発生するという意識を行政、住民が共有し、社会全体で洪水氾濫に備えなければならない。

- 計画的に治水施設の整備を推進するとともに、当面洪水リスクの高い状態が継続する地域については、優先して局部改修などの堤防機能強化等を行い、「逃げる」施策と一体となった洪水リスクの低減に取り組むべきである。
- 平成27年9月関東・東北豪雨のような治水施設の現況の整備水準を上回る豪雨への対策として、避難勧告等に着眼したタイムラインの整備と訓練、広域避難に関する仕組みづくりなどの「逃げる」施策及び浸水リスクを踏まえた土地利用を促進する「凌ぐ」施策を確実に推進するべきである。

5. 短時間豪雨対策及び長時間豪雨対策に共通する考え方

- 「逃げる」、「凌ぐ」施策を強化するとともに、「防ぐ」施策を着実に実施するという「今後の治水対策の進め方」の考え方に基づいた取組みは効果的
- 外水氾濫と内水浸水の一体的な解析による時系列の浸水想定図の作成
- 防災意識啓発及び地域コミュニティの防災力強化